枡野俊明「禅の庭の根本概念」

2018 年 10 月 26 日　共星の里 黒川 INN 美術館

　ご紹介ありがとうございます。枡野俊明でございます。
みなさん、あらためましておはようございます。高い所からで申し訳ございません。
みなさん、本日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。
このたびは知足先生に本当に貴重なご縁をいただき、英彦山そして黒川と、ご縁がなければお邪魔させていただくことはなかっただろうと、感謝申し上げます。

　まず、おそらくこの中に、昨年被災された、また身近な方々を送られた方々がいらっしゃると思います。お悔やみを申し上げるとともに、心からお見舞い申し上げます。
　ここ数年、7、8 年でしょうか、本当に地球規模でこの気候が変わってきてしまっています。今年も 7 月の西日本豪雨で大被害を受けました。そして 8 月また豪雨、台風 21 号で、そして北海道の大地震。本当にいままでは考えられなかったような災害があちらこちらに起きてしまいました。これらと比べるべきではないのですが、関東、とくに横浜には台風 24 号が襲ってきまして、私どものお寺では幸い建物は被害がなかったものの、大木が二つに裂け、あるいは根こそぎ倒れてしまい、現在それらを少しずつ切ったりどかしたりしているような状況でございます。海辺では瓦が飛んでしまい、そこら中がブルーシートという状況になっています。24 号のときはものすごい潮風でしたので、今になって塩害で木がどんどん枯れておりまして、とても水をかけた程度ではおさまりません。自然の流れに任せてはいるのですが、けやきも茶色ですし、桜も葉が散ってしまいました。救われるものもあると思いますがそうでないものもあるということです
　これも私たち人間が、自分のことを中心に考えて、生活を組み立ててきたことが原因ではないでしょうか。20 世紀はアメリカをリーダーとして、消費すること、物が豊かになること、それが経済を発展させ、国を発展させ、私たちは豊かさを享受することができるという方程式でした。世界中が、そうだそうだとその方程式についていったわけです。いま、そのしっぺ返しと申しましょうか、人間が自分たちを中心にして、どんどん自然に手をつけていってしまったがゆえに、このような気候の変動であるとか、温暖化であるとか、それに伴う海水の上昇といった様々な危機をもたらしているわけです。

　仏教には、「ともいき」という言葉が昔からあります。現代では共生とよみかえておりますが、人間も自然とともにある。人間も自然のなかの一員であるというふうに仏教では考えるのです。ですからその自然と一体となって、共に生かされていることを感じながら、感謝しながら生きていくことが基本なのです。そのことに、「ともいき」ということばを充てていたわけです。現在は人間にとって都合がいい、あるいは人間の利益になる、そういう発想のもと、すべてを経済性に置き換えてしまったがためにいろんな問題が起きてしまっているのです。
　近年、禅、あるいは仏教が、日本よりも海外で非常に注目されております。もう数十年前になりますが、その動向はドイツで始まりました。先ほど申し上げた、物の豊かさが人間の豊かさとイコールなのだという考え方にドイツの人が疑問を持ち始めたのですね。ものがひとつ手に入ると次の物がほしくなります。いくらものが豊かになっても、とめどもない執着（しゅうじゃく）の世界に入ってしまう。私はこれを「執着のスパイラル」といっております。洗濯機みたいなもので、そこに一旦入ってしまうとなかなか出られないのです。そうではなく、別の見方で豊かさというものを考えた国がどこ

かにあるのではないかと目を世界中に向けたわけです。そのとき、「なんだ。ニッポンはむかしから物の豊かさよりも心の豊かさが大事だといっていたじゃないか」ということで、日本に目を向けるようになりました。心の豊かさそのものが何よりも大事なのだと、何百年も前から説いている国があるではないかと。禅に対する関心もヨーロッパから火が付いてアメリカに広がって、いまニッポンに逆輸入ですよね、帰ってきている。

私は 6 月にアメリカのブラウン大学からよばれて講演にいきました。アメリカではいまマインドフルネスというものが非常にもてはやされている。マインドフルネスは、もともと禅から発したものです。ジョン・カバットジンというマサチューセッツ大学医学部の精神科の先生が、フロリダにある臨済宗のお寺にしばらく修行に入られた。すると、とても心が穏やかになり健康になった、と実感され、それを科学的に分析し始めたのです。そうしたら、科学的にいろんなことがわかってきました。幸福を感じる脳内伝達物質のセロトニンがたくさん分泌されるとか。これは日本の研究者がその前から言っておられたことですが、坐禅によって脳から α 波が出ます。また身体の血管がゆるんで血流がよくなります。緊張すると血管が 15%くらい減りますが、坐禅をすると逆に血流が 25%ほど良くなります。そのようなことがアメリカで科学的に発表されるようになりました。こういう「結果」が求められたことによって坐禅が良い、とされたのがマインドフルネスです。

ところが日本の禅、曹洞禅はまったく逆の発想なのです。「何々のために坐禅をする」のではありません。坐禅を坐して、なりきる姿こそがさとりの姿である。これを「修証一等（しゅしょういっとう：修行は悟りのための手段ではなく、修行と悟りは一体のもの）」と言います。結果としてそういうものが体得できるという考え方です。マインドフルネスと禅の決定的な違いは、マインドフルネスは結果、こういうのがありますからいいですよとやるのがマインドフルネス。禅の場合はそうではなく、ただひたすら行というものを積み重ねていくことによって、結果としてそういうものがついてくるのです。

たまたまブラウン大学に講演にいきましたら、今年 9 月からマサチューセッツ大学医学部のジョン・カバットジン先生（マインドフルネス）がその大学にうつられるということで、大変な工事をやっておられました。ちょうど大学では臨済宗で修行をされた先生のもと坐禅会をやっており（枡野先生は曹洞宗）、私も飛び入り参加しブラウン大学で坐禅を行ってまいりました。

今日はお話としては、この共星の里の校庭に流れ着いた石を、今後どうやって据えていったらいいのか、石の話を中心に組み立ててまいりました。仏教の話はおりにふれながら話していきます。

ここに出ている写真（山門を開いている画像）はもう 17、8 年前の写真です。全日空の機内誌で特集されたとき掲載されたものです。どうぞ私の話にお入り下さいということで、いまみなさんに向けて門をあけています。

まず日本の文化について、西洋文化との比較文化論からお話します。これはイタリアのベネチアにあるサンマルコ広場です。西洋にはこういう広場があります。もともと広場というのは、都市をつくるときに教会を街の中心につくり、そのそばに市庁舎をつくり、日本でいう商工会議所をつくり、裁判所を作ります。それらが囲む真ん中の空間が広場なのですね。教会は人々の心の問題を扱う。商工会議所はまちの経済を扱う。市役所は行政を扱う。そういうひとたちがみんな建物から出てきて、このまちを将来に向けてどう進めていったらいいか、発展させたらいいかを話し合う、コミュニケーション機能をもっているものが、実は広場なのです。ただ場所があるだけじゃない。いま日本でもあちこち広場が作られるのですが、コミュニケーション機能をもったものはまだまだ少なくて、なにかのイベントのため多用できるようにしたものがまだまだ多い。本来そういうもので

はないのです。
　次は、日本の広場です。西洋の広場のように、「コミュニケーション機能をもった議論の場」という考えをもったものではありません。これは桂離宮のなかにある広場で、楽しい場所となっています。江戸時代には防火用の空き地をたくさん作りました。秋葉原という地名は、あいた原っぱという意味なのです。江戸は火事があったときに隣にうつらないよう原っぱを意図的につくりました。そうして延焼を防ぐ。西洋のような広場の機能は日本にもともとなかったのです。

　次は建物。これはイタリアのサンマルコ広場の前のドームです。ヨーロッパは、石の文化です。石を加工して積み上げていきます。構造的に、石による「壁構造」です。このような開口部は、石をアーチ状に積むため、幅広くとることができず、縦長になっています。幅を広くとると、上から石が落ちてしまいます。壁中心の建物が、ヨーロッパの建物の特徴といえます。
　それに対して日本は「軸組み構造」といって、柱、桁、梁という構造だけでもつ建築です。壁というものがほとんどないのです。これが日本の建築の最大の特徴。これは、日本が木の文化だったからできることなのです。日本の場合は、建物の中にいても表の自然を肌で感じられる。中にいて表の自然と一体になれることを、最も尊いとしているのです。
　ただ現代ではここまで開放的な建物は許可されなくなりました。地震のとき、壁で持たせることが必要だということで、ある程度、壁量が必要になりました。ヨーロッパの建築において、教会や市庁舎など「忠誠」を保つものには、屋根に塔が建っています。宗教はキリスト教ですから、どこまでも神（天）に近くなるように塔を建てています。
　それに対して日本は大きい屋根をかけます。理由は、ひとつは夏の暑い日差しを「ひさし」で遮るためです。冬は、すーっと中まで日差しを取り込むような（ひさしの）長さを探り出してきました。我々の祖先が経験的に探り出したのです。また、建物の素材が石ではなく、竹やカヤを使います。他にも土壁や障子といった自然素材を使うので風雨に弱いのです。そのため、できるだけ軒を長くして風雨をさえぎろうとしました。

　それから回廊について。これはイタリアの教会です。アーチ状で、回廊の構造をもたせています。壁でないともたないのです。この回廊は内部空間に近いです。
　一方、これは京都の東福寺の通天橋という橋です。手前側から渡っていく回廊なのですが、柱と梁と桁、貫（ぬき）、屋根がかかっていますが、風はすーっと通り抜けます。雨は当たりませんが、まるで庭の中を歩いているように感じることができるのです。こういう空間作りを日本はとても尊いとしてきました。「山川草木悉皆成仏（さんせんそうもくしっかいじょうぶつ）」という仏語があるのですが、これは山も草も木もみな仏性をもち成仏するとし、その仏性を磨き出そうとします。自然を身近に感じるのが一番尊いという考えかたをするのです。
　さきほどの西洋の教会内部です。教会は宗教画を描いたステンドグラスをよく用います。それはなぜでしょう。教会内には壁と窓があります。すると壁のところは光を完全に遮ってしまいます。真っ暗な部分と、直射日光がさすところのコントラストが強すぎると、お参りをするような信仰の空間にはそぐわないのです。その光をガラスで拡散することによって、全体的にほわーっと光がとどくようにと考えたのがステンドグラスです。そこに宗教画を描くことで、ありがたみのある空間にするという発想がもともとありました。
　日本の空間づくりはどうかというと、これは京都の南禅院。亀山天皇が出家して上皇となられ、開山されました。滝口の石組みは作られたものです。樹林や池に囲まれた中に座敷があります。いわゆる、中にいても存分に周囲の自然（庭）を感じられます。中にいながら表にいるかのように感

じられる空間が一番尊いのです。
　これはイタリアの庭ですが、人工的なつくりとなっています。ヨーロッパの庭は人工物が主で、自然が従という主従関係があります。この庭は構造物が主であって、この緑（樹木）は構造物を引き立たせるための存在です。
　一方、これは京都の東屋です。東屋と緑（樹木）は主従関係ではなく、お互いがお互いの存在を引き立てあう関係になっています。相手が良くなることで自分がよくなる関係をつくりあげているのです。日本の庭は主従関係を作らない。
　フランスの建物と庭をみてみましょう。このお城に視線が行くような一点透視法でつくられています。西洋では、このようなものを美しいとします。それに対して、これは京都の嵯峨野の竹林です。日本では、このような空間を美しいといいます。瑞々しく、こころが清められるような空間を美しいとするのです。構造物としては、ただ竹の枝で垣根をつくっています。今は海外からの観光客ばかりですが、昔は人っ子ひとりいなかったのですよ。
　庭について。ヨーロッパの庭園は写真に撮りにくいのです。なぜなら上から俯瞰しているからです。（建物の）上からみたときに、美しくみえるように作庭されています。庭の樹木は当主の紋章や、リボンクエストをモチーフに剪定されています。煉瓦色の通路は、焼いた煉瓦を割って敷き詰められたものです。花壇には、プラントハンターが世界中から持ち帰った花々が植えられており、華やかです。
　これは日本の庭です。左右対称ではありません。すべて釣り合いの中で、ものを考えています。庭の景色と人々が使う建物は、表と裏の関係です。庭から建物が美しく見えるように配置してあります。庭の構成要素のひとつとして建物があるのです。
　マイセンのティーカップです。ヨーロッパでは、どういうものを「美しい」というのかというと、左右対称（シンメトリー）で、どこもゆがみがないような、寸分の狂いもなく図柄が描けた物を最高の美しさというのです。これ以上手を加えることができないものを、一番美しいといいます。私はそれを、「完全なる美」と呼んでおります。それに対して日本ではどうかというと、これは志野の抹茶茶碗です。お茶は中国から伝わったものです。
　古代、黒川も大陸との深い関係があったといいます。私は、英彦山そのものが大陸との関係の中で成り立ってきたのではないかと思います。そしてここ黒川には英彦山座主の初代から 14 代までのお住まいがありました。ここに筑後川がありますが、大陸と貿易するには川があることが大切です。情報、文化、ものの往来を直営できるからです。この場所をおさえられるということは、大陸との関係をおさえることができることになります。おそらくここ一帯は、古代最も進んでいた文化圏だったでしょう。
　話はとんでしまいますけれど、英彦山は石の加工文化がすごいと思います。古代の九州には、石の加工技術をもつ磐井一族、渡来の技術者たち、また辰砂（しんしゃ）＝硫化水銀、丹（に）の鉱脈をみつけ採掘する丹治（たんじ）一族もいました。そのような技術者たちがもたらした豊かな文化によって、日本で最も進んだところになり、天皇家など皇族の方々も、黒川や英彦山にこられたのでしょう。
　中国の天目茶碗は左右対称です。しかし日本にくると、左右対称を壊してしまいます。完全なる形、完璧な形は、それで終わってしまう、と考えるのです。完璧すぎるとそこに作り手の人間性や、精神性を注ぎ込む余地すらなくなってしまうからです。であるからこそ、それを一度超えていくことこそが大事なんだというのです。

　禅では、完全なものを嫌います。修行に終わりがありません。「百尺竿頭に一歩進む」というこ

とです。形も、完全なものは、あえて壊してしまいます。そこに、精神性や人間性を注ぎ込めるのです。禅は、「完全を超えた不完全」が最も美しいと考えます。不完全は通常、完全に至る手前という意味ですが、この場合の不完全とは、「完全を超えた領域」を指します。そこに、禅の考えが深く入っています。

例えば、陶芸において完全をこえた不完全に到達したとき、作品が自分そのものになったと感じたとき、手が自然と離れるといいます。さらに、器を焼いている際は、火の具合とか、木や風の状況で思いも寄らぬことがおきます。窯変ですね。そこが美しいのです。この窯変が器の景色であり、顔なのです。このように、禅では人間の力を超えた結果をとても大切にします。二度と出会うことができないもの、そこに価値を見いだすのです。

お花で比較いたしますと、西洋ではフラワーアレンジメントといいますね。西洋では何を美しいと称するかといいますと「色」、そして「ボリューム」なのです。いかに色を鮮やかに、ゴージャスにして人をお迎えするか。そしていかにボリューム感をもたせるか。アレンジメントはボリューム感を非常に大事にします。考え方としては、花のアレンジメントですね。

日本の場合は、花を「生ける」。一輪でもいいです。そのものの命をここに生ける。自分の命をのせていける。お客さんを迎えるときに、それ（そのものの命）を表現する。そして、「あなたのために生けました」とは直接言いません。客人も、「夏だから涼しいお花を生けてくださったのだな」「私の好みの色を選んでくださったのですね」と思っても、全てを言葉にせず、ありがとうございます、と心と心で伝え合うのです。以心伝心です。これを禅では、「南山打鼓 北山舞（なんざんにくをうてば　ほくざんにまう）」といいます。師が遠く離れた山で打った鼓に合わせて弟子が舞を踊るように、言わずとも心を通わせる関係のことをいいます。おもてなしとは少し違うのです。

絵の場合、例えば西洋の油絵はデッサンが基本です。デッサンをくりかえし、これで良いという段階になったとき、色をのせます。油絵の場合は、何回も塗り重ねます。完全なる美しさをどうやって表現するか、ということ突き詰めて描くのです。

一方、日本における墨絵の場合。墨に五彩あり、といいます。墨の黒色の中にも、5 つの彩りを見出すことをいいます。本来五彩とは無限大に広がる色を言います。ここに墨で 6 つの柿が描かれていますが、この柿がどのように熟れているのかは、観る人の想像力に委ねられています。「観る人の力量」を、日本の芸術は問うのです。ここが西洋の芸術と違う点です。西洋は、あるだけのものをすべて表に出します。日本は、奥に秘めたものがあります。そこに精神性の違いがあるのです。観る人に、観る力量をもとめていくのが日本の美術なのですね。どの柿がどのくらい熟しているか、それぞれ観る人の判断に委ねられます。その背景に、禅の考え方があります。

これは曹洞宗の大本山「總持寺」にある大僧堂です。曹洞禅の坐禅とはどういうものか。僧（雲水）は大僧堂の壁に向かって坐します。雲水たちはそれぞれ役目をもっていて、作務のために僧堂を出入りします。「起きて半畳寝て一畳」といいますが、坐禅も寝るのもそこです。修行僧一人が使えるのは、この畳一畳と函櫃（かんき）とよばれる二段の収納スペースだけです。ひとつの僧堂に多い時は 100 人以上寝泊まりすることになります。その生活を続けていると、自然と周りの人に対する配慮、思いやりの心が育つのです。現代社会にとても欠けているところです。いまの子供は一人ずつ子ども部屋を与えられて、そこに逃げ込めば何でもできてしまいます。気遣うということができなくなっている。「気遣いを養う場所」がなくなってしまったといってもいいでしょう。

禅とは、「本来の自己に出会う」ことです。１点の汚れもないような美しい心をだれしもが持っています。その心に、もう一度自分で出会うように修行をします。私たちは毎日いろいろな情報、

まわりからの刺激で、あれがほしい、こうなりたい、という欲が出てきます。これを執着、我欲といいますが、そういうものに包まれてしまう。それがどんどん厚くなっていく。こういう情報の時代ですから、余計に至る所にいろんな執着が生まれてしまいます。知らなければ要らなかったものが、知ったからほしくなる。そういうものが、美しい１点の曇りもないような心に、体脂肪のようについていってしまうのです。これを私は「心のメタボ」といっています。身体のメタボは太ってきてわかります。スポーツをしたり食事制限したり、改善することができるのです。しかし、心についた体脂肪は、自分で気がつかないかぎりわからないのです。禅は行をして、それをできるだけ薄くしていこうとするものです。規則正しい生活、たがをはめないと、人間はどんどん楽な方にいってしまいます。行を通してそれらを薄くしていくことで、本来の自己（仏性、仏心、真如、仏）に出会うことを目指すのが禅です。犬、ネコなど動物は悩むことがありません。ストレスで精神疾患になることもないのです。ある意味、悟っているともいえます。人間は、頭で判断し、比べてしまいます。本来あるがままの本性をみません。比較して考えることをしない方がよいのです。そういうものの考え方が芸術にも影響を及ぼします。

　これは禅の「書」です。上手下手じゃなくて、人間性、生き方が表れています。これは一休さんの書です。一休さんは頓智によって有名になりましたが、禅僧として非常に厳しい指導をされました。一休さんは室町時代、一休寺に虎丘庵（こきゅうあん）という文化サロンのようなものを築いていました。応仁の乱で焼けた紫野の大徳寺を復興したあと、京都の田辺の一休寺に集まったのは、能楽でいうと世阿弥の娘婿の金春禅竹（こんぱる・ぜんちく）、茶の湯の創始者の村田珠光（むらた・じゅこう）、連歌師の柴屋軒宗長（さいおくけん・そうちょう）や、俳諧作者の山崎宗鑑（やまざき・そうかん）などの文化人が、虎丘庵に来て一休さんに指導を受けていたそうです。そうそうたる人物が、一休さんのもとで参禅し、おのおのの専門を極めていかれました。

　「禅の庭」には文化人だけでなく、将軍や武士も訪れるようになりました。これは京都の苔寺、西芳寺の庭園です。日本最初の枯山水といわれています。石組によって三段になった滝が表現されています。「三級浪高魚化龍（さんきゅうなみたこうして　うおりゅうとけす）」という中国の故事・登龍門を造景した様式で、「龍門瀑（りゅもんばく）」といいます。滝の前に置かれている石は、三段の滝を登り龍にならんとする鯉を表しており、「鯉魚石（りぎょせき）」とよばれます。昨日、知足先生に英彦山にある雪舟の庭をご案内いただきました。その雪舟庭にも、龍門瀑と鯉魚石がありました。禅は、このモチーフを好みます。どのような人でも、きちんとした先達（師家）について指導受けることができれば、その道を成し、悟りを開くことができるのです。そしてやはり、人生には関門といいますか難所がある。それを乗り越えると新たな世界が開けるのです。鯉魚石は修行僧の例えなのです。何万匹の鯉の中に１匹、三段の滝を超えるものがある。その鯉は天に昇って龍と化します。

　禅と庭の関係について。中国の霊穏寺が「禅の庭」の中心です。その流れを汲んで宋からの渡来僧・蘭渓道隆（大覚禅師）が建長寺を開き、庭をつくったとされています。「禅の庭」を本格的に発展させたのは、この建長寺で修行をした夢窓疎石（夢窓国師）です。国師は権力に近づかず、東北地方を巡り歩き、自然に親しむ生活を好みました。なで肩で女性的なお顔をされていますが、修行の指導は厳しかったそうです。国師は、「仏法の真髄をつかんだ人は、自然の中に自らの心を自由に遊ばすことができる（箇中人作箇中遊）」　と、その境地を偈（げ）にしています。

　そして、こちらに雪舟が水墨画になります。破墨山水画（部分的な調和を墨によって破り，より高い調和を求めること）を確立した有名な禅僧です。禅では自分の会得した心の状態をなにかに置

き換えようとします。その中で、絵を得意とした僧を「画僧」といいます。立体を得意とし、庭をつくる僧を「石立僧」とよびます、石を立てる僧侶とかきます。文学、漢詩を好んだ僧侶を「五山僧」といいます。絵や庭は好きな人しかできません。こちらが雪舟の肖像画です。雪舟は京都で修行して絵を極めます。自分の絵を確かめるために、中国に渡り修行します。間違いないと自信をもって京都にもどりましたが、応仁の乱の渦中でした。そのため山口や九州（英彦山にも 3.4 年）に避難し、その間に良い作品を残しました。雪舟の作品が残っているということでも、このあたりは大切な場所です。

いま、日本文化の中で、「道」という字がつくものがあります。茶道、華道、書道、柔道、剣道、みんな道がつきます。禅の考え方と技術が結ばれて、皆「道」が付くようになったのです。剣なら剣の道を通して生き方を極めようというのが剣道。茶の湯をとおして生き方を極めようというのが茶道。宮本武蔵、最後は剣を抜きませんでした。世阿弥が書いた「風姿花伝（最初の能楽論書）」は、本当に禅・曹洞宗の考え方そのものです。千利休も最後は出家し、僧侶になります。この利休の木彫を大徳寺の山門の上に設置したため、頭上に利休の足があるとして豊臣秀吉の怒りをかい、切腹を命じられたといいます。

禅の考え方で、何を美しいとするかについて整理します。

ひとつめは、「不均整」です。これは日本の水差し。どうみても均整ではなくゆがんでいます。でもこれが美しい。こういうものを禅では好みます。

2 つめに、「脱俗」。俗を脱したような美しさ。これは京都の苔寺の朝 4 時半です。朝靄が、残っています。本当に清らかです。

3 つめのキーワードは、「自然（じねん）」です。作為をもって作っているけれど、それを感じさせないようにするのが禅なのです。いかにもつくりました、というのは無粋としていやがります。

4 つめに、「簡素」です。シンプルな空間の美しさ、素材そのものの美しさを大事にします。西洋では壁にフレスコ画を描いて装飾しますが、木なら木の美しさ、構造の美しさを徹底的に突き詰めるのです。禅寺の建物は、ほとんど彩色されていません。中国では寺院に漆を塗っていましたが、禅ではそれもやりません。

5 つめに、「静寂」です。これは京都のお寺です。本当の心の静けさとは、限りない静けさです。音が全くしない空間かというと、そうではありません。禅では、まちのなかにいても動いていても、自分で静寂を感じられるようになるのが本当の尊い静寂である、と捉えます。白隠慧鶴禅師は、「動中工夫勝静中百千億倍（動中の工夫は、静中に勝ること百千万億倍）」と説きました。静かにするときの静はもちろんですが、騒がしいときでも心を穏やかにして静をたもつようにできれば一番尊いのです。

6 つめに、「枯高（ここう）」です。これは禅僧の書ですが、墨が枯れた中の勢い、なんとも言えない味があります。そして生臭くないのです。枯れきった状態を枯高といいます。悟ったということを一切感じさせない。存在で他を圧倒するような存在感。枯れた古木の力強い美しさ。「枯木竜吟（こぼくりょうぎん）」といいます。枯れた木に風が吹くと、龍がひゅーっと鳴くような音がでる。枯れた佇まいの存在感です。

7 つめに、「幽玄」です。限りない含蓄、秘めた美しさ、あるだけのもの全てを見せない。みえるところ見えないところを作る。想像する。見る人の想像力を問うのが大事なのです。能では、静止して限りない含蓄を秘め「遠見」することが大切で、みるものの想像力を問います。どれだけ遠くをみるかは、見る人にゆだねられています。「不立文字、教外別伝（ふりゅうもんじ、きょうげべつでん）」といいます。いちばん大事なことは文字や言葉にならないのです。大事なことは文字

ではないところで伝えていきます。「面授」といいます。人から人へ伝えていくのです。

庭について、すべての基本は「自然」です。英彦山には「四土結界（しどけっかい)」があり、禁足地に近い一番上の結界は、峰入りという厳しい修行を 15 回以上しなければ入れなかったところです。ここにはブナの原生林がありました。この写真は秋田のブナ林です。この映像を覚えておいてください。これはある美術館の庭です。下は苔ですが、さきほどの自然の風景とどこか近いと思いませんか。

これは十和田湖です。これは岩手県の平泉にある毛越寺（もうつうじ）の庭です。平安時代に書かれた作庭記には、「池ならびに河の汀（なぎさ）の白浜は、すきさきの様に尖り、鍬形の様に刻み込むべきである」とあります。十和田湖の公園の湖岸は近しいデザインになっています。

日本は山が多いですね。これは日光の滝です。日本の庭には、いたるところに滝がモチーフとして出てきます。これは禅寺である鹿苑寺の滝です。金閣寺のことですね。その庭の龍門漠（りゅうもんばく）です。禅寺はだいたい、滝をつくったらこの形式をとることが多いです。禅寺だとすぐ分かります。

（枡野先生の作庭について）

こちら（共星の里）の校庭にある石は、ご縁があって来られたものです。

一般的に作庭の際、まず石を選ぶところから始まります。これは今年の夏、中国での作庭風景です。庭のための石を選んでいるところです。石のスケッチをして、寸法を測っていきます。その石をどこで使うかプランを立てるのです。池とか滝とかつくるときは仮組みをします。実際の敷地ではないところに、同じような条件をつくって、そこに石を理想的な形で据えていきます。これが水のラインです。まわりに基準となる丁張り（建物の正確な位置を出す作業）を出していきます。それから 3 段の滝を作っていきます。これで良い、となったら全て測量します。石によっては底が尖っているところがあります。そこの深さを計っておいて、現場でそれを調整するものを打ってもらいます。石がまず運び込まれたところです。角度を微調整するために、下部にいれた石を「間詰石（まづめいし・又は、かいづめいし)」といいます。英彦山の雪舟庭では、盛り土が流れてこの間詰石が見えてしまっています。逆にいえば、あの石を作庭家が意図的に据えた、という証しといえます。

さきほどの仮組みを実際に施工し、水を流しているところです。あの仮組みがあったからこそ、この景色ができるのです。仮組みでは水を流すことはありませんけど、水がどの高さでどこから落ちてくるかだいたい全体の景色を読み取ることができます。それを最後に微調整していきます。これは神社。相模一宮の寒川神社の庭と建物をデザインしたときのものです。こういうのを伏石といいます。現代的なコンクリート、ガラス、鉄骨で作られる建築には御影石を使います。

次は、庭の石の形についてお話します。この丸印がついたものは、庭に据えたら良いと言われている石の形です。「富士石」「戸板石」「臥石（ねいし)」「長臥石」です。石を地中に埋めこむ作業を「根入れ」といいます。根が切れないように据えると安定し、地中に巨大な石があるように見せることができます。石の上の面「天端（てんば)」は、水平に近い形が落ち着きを与え、これがキチッと見えるように据えます。これも石の根が切れないようにします。そしてこれは臥石ですが、気勢として右へ向かって動くような感じがみて取れます。石には「石心（いしごころ)」がありま

す。その心を読まなければいけません。これらの×印がついている石は、庭に据えない方がよいといわれるものです。「欠け頭」「剣先」といった石は、刀を向けられたような感じを受けるので使いません。「元細石（もとほそいし）」「垂れ覗き」、こういう石を据えるのなら、この線まで地面に埋めた方がよいでしょう。

（設置された庭石の各部名称の画像）上が天端で、土に埋まっている下が根入れです。土に埋めるラインはA（石の一番ふくらんだところ）でなきゃいけない、B（Aより下の細い部分）はだめです。石には正面（顔）があります。この石は右にいこうという気勢がありますね。もし右に壁があるとすぐぶつかってしまいそうになるので、左勝手の石とよばれます。これは逆ですね。気勢が左に向いていますので、右側で使うといきる右勝手の石といいます。

斜面に据えても、天端が水平なら安定してみえます。天端を斜めに据えると、不安定になります。そういう使い方はしない方がよいのです。「二石組」という石組を紹介します。気勢がある2つの石を、お互い向い合わせると安定します。気勢を外側に向けて組み合わせても、見えないロープで引っ張られているような力が生じ安定するのです。安定した石同士でも、高さのある石の側面に平たい石を組み合わせることで、船が進むような動きを生み出すことができます。これは「三石組」といって、中心の高い石に左右の石の動きが集まり安定しています。これらはノルウェー、香港、ベルリンで作庭した実際の石組です。この石は日本から運びました。

次は、木の植え方です。「松の立入れ」といい木の頭を、地面に対して垂直にまっすぐに入れるように植えます。「真木（主役の木）・添（その隣）・対（真木と添えの向かい）・前付け（手前の低木）・見越し（真木の背後）」と、固め過ぎずバランスよく配置します。生け花の「天地人」のレイアウトと似ています。何本かの木をまとめて群植するときは、それぞれがひとつの固まりとして感じられるようバランスをとって植えます。二・三・五本組という寄植えの配列もあります。

ここから私の作品です。これは水戸の祇園寺客殿庭園です。これも龍門瀑なんです。垂直線に対する水平線のバランスを工夫し、もともとここにあった石を活かしました。次は、1999年に芸術選奨文部大臣新人賞をいただいたときの作品です。ル・ポール麹町の《青山緑水の庭》は、狭いところに作られています。これは地下の駐車場の排気ダクトの部分。困りましたが、逆手に取ってデザインに活かしました。これは翠風荘で、建物も庭も私がデザインしました。庭を回遊した際、東屋にもなるようにしています。

これは渋谷にありますセルリアンタワー東急ホテルです。いま国際評価10位の中に日本のホテルは3つあり、このホテルは9位となっています。他は帝国ホテルとオークラですが、そのなかでも一番リピーター率が高く、空室率が低いそうです。15年くらい前に建設の相談を受けたときは、そのイメージ図にはすごいシャンデリアがぶらさがっていました。そういったホテルは世界中どこいってもあります。ここ日本にしかない空間にしないと記憶に残らないではないですか、といったら、ではどうしたらいいのですかと。日本の空間づくりの基本である外部と内部が一体となる空間作りをしたらよい、簡素の美を求めなさい、と助言しました。それならやってくださいとなって、インテリアも全部コーディネートしたのです。これは雪見障子のアイデアです。アールにすることによって広がって見えるように空間を取りました。花見鉢をおいて、広がりをもたせています。花をいける作家は、オーナーと私も入って面接して決めました。ここはコーヒーラウンジで、ここはロビーです。これが外側の庭。ここと一番高いところ5㍍落差があります。禅は負の物を逆手にとります。排気ダクト部分を石によって滝のようにデザインしています。

これはカナダの大使館です。現代建築にあう枯山水をと模索しまして、いきついたのが御影石をつかった表現です。カナダの建築家と一緒に作庭しました。ドイツ、ベルリンの庭の材料は、100%

ドイツ産のものを使いました。石を集めましたが、1㌧クラスのものは少なく苦労しました。来訪者には、椅子に腰掛けて庭を眺めてもらうようにしました。ドイツ人は背が高いので、それに合わせて建物のモジュールを変えました。書院の掛軸には「融合すること水の如し」と書きました。東西ドイツは、統合 10 年たっても、いまだ反目する部分があり、完全には溶けあっていませんでした。水のごとく仲よくやりましょう、というのがこの書にこめた想いです。

シンガポールの庭は回遊できるようにしました。

この庭は人工地盤上につくっています。パーティーやバーベキューがここでできるようにしています。ガラスを多く使い、室内にいても外（庭）にいるかのように感じさせています。これはクラブハウスです。

これは鎌倉の個人のお宅です。石や灯籠を配置しています。また、もともとあった樹木を活かして、植え替えました。

これは中国の唐山です。手水の水に竹が写っている様子です。こういうものを私たち日本人は美しいと感じてきました。「水に映った月」を愛でる。私は、こういうものを感じていただける場所をつくりたいのです。

みなさん、お疲れ様でございました。ご静聴ありがとうございました。

枡野俊明「禅の庭の根本概念」2018 年 10 月 26 日
「黒川復興ガーデンとバイオアート -英彦山修験道と禅に習う-」
（2017 年九州北部豪雨災害被災地復興のための取組み）
九州大学ソーシャルアートラボ